故事成語――杞憂

杞の国に、人の天地崩墜して、
身の寄する所亡きを憂へて、
寝食を廃する者有り。
又彼の憂ふる所あるを憂ふる者有り。
因りて往きて之を暁して曰はく、
「天は積気のみ。処として気亡きは亡し。
屈伸呼吸の若きは、
終日天中に在りて行止す。
奈何ぞ崩墜を憂へんや。」と。

〈『列子』より〉

杞の国に、天地が崩れ落ちて、
身の置き所がなくなるのを心配して、
寝ることも食べることもできないでいる者がいた。
さらに彼が心配していることがあるのを心配する人がいた。
そこで出かけていって彼に教え諭して言った。
「天は大気の集まりにすぎない。どこであろうと大気のない所はない。
人が体をかがめたり伸ばしたり息を吸ったり吐いたりするようなことは、
一日中天の中で行動していることなのだ。
どうして天が崩れ落ちることを心配する必要があろうか、いや必要ない。」と。

さらに、その心配する人が、「太陽・月・星が落ちはしないか。」「大地が崩れはしないか。」と言うと、教え諭す人が、「太陽・月・星も大気の中で光っているものだから、落ちてきたとしてもぶつかってけがをすることはない。」「大地は土の塊にすぎず、四方の果てまでぎっしり詰まっていて崩れることはない。」と言った。その心配していた人はすっかり心が晴れて喜び、教え諭した人も安心して大いに喜んだ。